

# 「Xがない，YがXです」 —疎外論から見た地域活性化戦略—<sup>1)</sup>

矢 守 克 也  
京都大学防災研究所

李 勇 昕  
京都大学防災研究所

## 要 約

高知県黒潮町が掲げる「私たちの町には美術館がありません，美しい砂浜が美術館です」というフレーズは，「Xがない，YがXです」の形式をもつ。本論文では，この形式が，「限界集落」，「地方消滅」といった言葉によって形容されるきびしい状況下にある地方の地域社会の活性化を支える根幹的なロジックになりうることを，「Xからの疎外／Xへの疎外」の重層関係を基盤とした見田宗介の疎外論の観点から明らかにした。この疎外論の根幹は，「Xからの疎外」（Xがないことによる不幸）は，その前提に「Xへの疎外」（Xだけが幸福の基準となっていること）を必ず伴っているとの洞察である。よって，Xの欠落に対してXを外部から支援することは，「Xからの疎外」の擬似的な解消にはなっても，かえって「Xへの疎外」を維持・強化してしまう副作用をもっている。これに対して，YがXの機能的等価物であることを当事者自身が見いだし宣言したと解釈しうる黒潮町のフレーズには，「Xからの疎外」を「Xへの疎外」の基底層にまで分け入って根本から克服するための道筋が示されていると言える。

キーワード：地域活性化，疎外論，Xからの疎外，Xへの疎外，幸福

## 1. 地方の苦境

高知県黒潮町が掲げる「私たちの町には美術館がありません，美しい砂浜が美術館です」というフレーズは，「Xがない，YがXです」の形式をもつ。本論文では，この形式が，「限界集落（限界自治体）」（大野，2005），「地方消滅」（増田，2014）といった言葉によって形容されるきびしい状況下にある地方の地域社会の活性化を支える根幹的なロジックになりうることを，「Xからの疎外／Xへの疎外」の重層関係を基盤とした見田（1996）の疎外論を踏まえ（主に，5～6節），かつ，そこに独自の展開を加えて明らかにする（主に，7～9節）。

現在，日本社会において，地方の地域社会が非常にきびしい状況にあることは，もはや論をまたない。上で引

用したセンセーショナルな用語が，何よりもそれを物語っている。特に，これまでそうした地域を支えてきた農林水産業の担い手が，急速に進む少子高齢化とともに失われ，産業・経済的基盤の空洞化が深刻である。そこに，市町村合併による行政サービスの弱体化が加わり，病院，福祉施設，学校，路線バス，ガソリンスタンドといった基礎的な社会インフラまでもが縮小・消滅し始めている。

もちろん，こうした一面やそれをクローズアップした上記の用語群からのみ地域社会の現実をとらえることに対する批判や反発もある（山下，2012；2014など）。また，「田舎暮らしのすすめ」，「Uターン，Iターン」，「田園回帰」（たとえば，小田切・広井・大江・藤山，2016），「里山再生・里山資本主義」（たとえば，藻谷・NHK広

第1著者連絡先 e-mail: momo-san@mx5.canvas.ne.jp

1) 本論文のとりまとめにあたっては，松本敏郎氏（高知県黒潮町役場），友永公生氏（同左）の全面的なご支援を賜った。心からお礼を申し上げたい。

島取材班, 2013), 「コンパクトシティ/縮小都市」(たとえば, 矢作, 2014), 「コミュニティのグループ・ダイナミクス」(杉万, 2006), 「事起こし」(岡田, 2015) など, 地方社会の弱体化に対抗しようとする社会運動やそれを支えるコンセプトを整備する動きも少なくない。もっとも, 現時点で日本政府が看板政策の一つとして掲げる「地方再生(創生)」の道のりがそれほど容易ではないことは, 相変わらず歯止めがかからない東京一極集中, あるいは, 札幌, 福岡など中核都市へのミニ一極集中の事実を見ても明らかである。

## 2. 「震災前過疎」—高知県黒潮町

本論文で注目するフレーズ, 「私たちの町には美術館がありません, 美しい砂浜が美術館です」が生まれた高知県黒潮町も, ここまで述べてきた種類の困難に直面している地方自治体の一つである。黒潮町は, 高知県西部に位置し, 県庁所在地の高知市からは鉄道, 道路いづれを利用して約2時間, 四国山地を背景に太平洋に面した人口約1万1千人の小規模な自治体である。現在の町は, 2006年3月, 旧大方町と旧佐賀町が合併して成立した。主な産業は, 農業, 漁業, 水産業および観光業である。特に, 著名な漁船団によるカツオの一本釣り, 県内有数の砂浜(「入野の浜」)や温暖な気候を活かした観光業(ホエールウォッチング, スポーツツーリズムなど)は全国的にも知られている。

しかし, 黒潮町は非常にきびしい状況にも直面している。ここでは, その事実を, 町の人口と高齢化率(いづれも概数)というもっとも単純な指標であとづけておこう。町役場が公表している報告書「黒潮町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン(平成27年度版)」(黒潮町, 2016)によると, 1980年に16,100人(高齢化率15%)だった人口は, 1990年には15,400人(同21%), 2000年には14,200人(同29%), 2010年には12,400人(同35%), そして, 今年2017年には11,500人(同42%)となった。40年たらずの間に人口が30%も減少し, 高齢化率は3倍近くに跳ね上がったことになる。さらに, 同報告書は, この先, 町の人口は2030年には8,400人(同47%), 2040年には6,600人(同49%)になると推計している。もちろん, この人口減(急速な高齢化)が, 基幹産業たる漁業, 水産業の低迷, 雇用の減速, 財政(税収)状況の悪化などを引き, それがまた人口減をもたらすという悪循環を引き起こしている。

さらに, ここで注目されるのは, 2011年以降, 毎年, 約100人の社会減が生じているとの報告である。すなわち, 黒潮町からの転出者数が転入者数を大きく上回り,

人口が流出しているのである。この一因となっているのが, 2011年3月に発生した東日本大震災のインパクト, より正確には, その1年後の2012年3月に政府が公表した南海トラフ地震に関する地震・津波想定である。よく知られているように, 黒潮町はこの想定で全国最悪の34メートルもの高さの津波が想定され, 一部の週刊誌に「町が消える」とまで書き立てられた。「そんな津波が来たらとても助からない」, 「町の将来に不安を感じる」, 「安心して子育てできない」, こういった声が人口流出のベースとして存在する。

「震災前過疎」は, こうした状況に強い危機感を覚えた黒潮町役場の友永公生氏が創作・提起した用語である(友永, 2017)。東日本大震災の被災地で, それ以前から問題化していた過疎高齢化, それと連動した地場産業の弱体化, 人口減が, 被災によって一気に加速したとの指摘や報告は数多い(たとえば, 綱島・岡田・塩崎・宮入, 2016)。それもむろん深刻な社会問題である。それに対して, 「震災前過疎」という言葉で表現されているのは, 被災する前から, 言いかえれば, 実際にはまだ被害が生じたわけではないにもかかわらず, 被害を想定した「情報」の作用によって, すでに被災したかのような状況が引き起こされているという憂慮すべき事実である。

## 3. 「砂浜美術館」という独創

1989年, 上述の通り, すでに過疎高齢化が表面化していた黒潮町で, 一つのプロジェクトが進行していた。「砂浜美術館」の構想である。砂浜美術館とは, 文字通り, 砂浜という美術館である。その代表的なイベント「Tシャツアート展」では, 砂浜いっぱい1,000枚のTシャツが潮風に揺れる(図1)。「BGMは波の音, 月の明かりが照明である」(NPO砂浜美術館, 1989)。本論文の冒頭に掲げたフレーズは, 「砂浜美術館」を象徴する言葉として, 事業の牽引役となった松本敏郎氏(黒潮町役場)らが提起したものである。この卓抜な独創が誕生した背景について, 松本氏は, こう語っている(以下, 3つの引用は, 松本(1999;未公表メモ)による)。

「地元の高校を卒業して, この地域に就職した私たちは, いつも都会を追いかけ, あこがれてきた。しかし, いくら一生懸命追いかけても, 都会はそれ以上に速いスピードで先を走り, 決して追いつくことはできなかった。」

「ちょっと待てよ……, 何かおかしいぞ……と立ち止まった。そして, 振り返ったり, 自分の足元に目を



図1 砂浜美術館におけるTシャツアート展  
(写真提供：高知県黒潮町NPO 砂浜美術館)

向けたりして、私たちにとって本当に大切なものは一体何だろう……と周りを見つめ、考えるようになった。」

「砂浜美術館は、1989年6月に…(中略)…誕生しました。誕生したと言っても、物理的に存在しなかった物が生まれた訳ではなく、今までもあったもの(入野の浜)を少し工夫する(意義と主体性を加える)ことによって、新しい価値有る物(美術館)にしたのです。」

当初は単発のイベントに終わることも危惧されたが、その後、「砂浜美術館」はNPO法人化され恒久的な組織となり、ホエールウォッチング、海岸に打ち寄せる漂流物の展示会、砂像の制作イベント、天日塩工房など、多くのアクティビティの拠点として、現在も町を支えている。キックオフのときからの看板イベントである「Tシャツアート展」も現時点まで毎年開催され、すでに29回を数えている。ただし、今でも、立派なハード施設(建物)としての美術館が存在するわけではない。

重要なことは、「砂浜美術館」を支える基本精神、すなわち、「私たちの町には美術館がありません、美しい砂浜が美術館です」に、町の衰退・低迷、および、それと連動した町の将来への不安というきびしい現実に対して、これまでとはまったく異なる態度が込められていることである。それは、「ないもの」、「なくなっていくもの」を嘆いたり、たとえば、迷惑施設や忌避施設の誘致・受入と引き替えに外的な支援を呼び込み、それによって

「ないもの」を獲得したりする戦略とはまったく別の態度である。

本論文の目的は、この態度を根底から支えているロジックを、従来のそれとの違いにも注目しつつ、学術的な用語—見田(1996)の疎外論の用語—を用いて位置づけることである。以下、節をあらためて、そのための作業に入ることにしよう。

#### 4. 「Xがない」—被災地復興の障壁

考察を開始するにあたって、まず、分析の対象となっているフレーズを、少し一般化(形式化)しておこう。「私たちの町には美術館がありません、美しい砂浜が美術館です」は、「Xがない，YがXです」の形式をとっていると考えることができる。ここでこのような形式化を提案したのは、一つの有力な先行研究が存在するからである。それは、被災地の災害復興における原理的な課題は「Xがない」という形式をとった当事者の言葉にあると指摘した宮本(2016)の論考である。2004年に発生した新潟県中越地震の被災地(長岡市木沢集落、当時は川口町)で、10年以上にわたる復興支援活動に関わるアクションリサーチを実施した経験を踏まえて、宮本(2016)は中山間地(言うまでもなく、過疎高齢化の課題に直面する地域が多い)には、「Xがない」という形式の住民の言葉に象徴される構造的課題があると指摘している。具体的には、「水がない」(地震で水脈が変わってしまった、もう田んぼは無理)、「道路がない」(だから、

集落の再建なんて無理)、「若者がいない」(だから、集落に未来はもうない)といった言葉である。こうした態度のために、復興に向けた前向きな雰囲気なかなか出てこなかったというのである。

ここで重要なことは、「Xがない」が、地域社会をめぐる依存と支援の袋小路の構造をよく表現している点である。すなわち、「Xがない」という訴えや態度に対して、「それなら、水を引きましょう、道路を建設しましょう」と、Xを外部から支援する活動が逆に地域の依存心を生んで、復興へ向けた被災者の内発的な意気込みや主体的なとりくみの芽を摘んでいる。Xの欠落・不足という課題(「Xがない」)に、(外部からの)Xの提供・支援という対策で応じるのは、一見自然でそこには何の問題もないように思える。しかし、そうではないのだ。

では、どうすれば、この依存と支援の袋小路から抜け出せるのか。宮本(2016)が示唆している方向は、外部支援者が、欠落や不足が課題となっているX(この場合、水、道路、若者)からいったん離れ、当該の地域に豊富に「ある」にもかかわらず、地域住民が必ずしもその価値を重視していない別の対象を起爆剤として災害復興を推進するという方向性である。宮本(2016)では、山菜料理、伝統的な祭り、星空などが、欠落・不足する水、道路、若者の代替物として機能したことが紹介されている。Xの欠落・不足の解消を直接的に「めざす」ことをあえて回避ないし延期して、そこにすでに「ある」対象とともに「すどす」ことを重視したアプローチである。こうした方向性が有する効果や限界については、この後6節で再論するとして、ここでは、それが、「Xがない、しかしYがある」という形式で表現しうることだけをまず確認しておこう。

### 5. 「Xからの疎外/Xへの疎外」

同論文はそうと明示してはいないが、宮本(2016)の議論には重要な理論的前提が存在する。それが、社会学者の見田(1996)が提起した疎外論、すなわち、「からの疎外/への疎外」という2種類の疎外の重層関係を重視した疎外論である(真木・大澤, 2014も参照)。黒潮町が提起したフレーズの意味について精緻に考察するためにも、若干回り道にはなるが、見田の疎外論について以下詳しく見ていこう。なお、「からの疎外/への疎外」は、本論文の表記にあわせて、以降、原則として「Xからの疎外/Xへの疎外」と表現する。

この疎外論の核心は、「Xからの疎外」が生じているとき、言い換えれば、だれかがXから疎外されているときには、その根底に、つまり、それよりもさらに深い

ところに、常に必ず、「Xへの疎外」が存在している、という洞察にある。たとえば、「お金からの疎外」(「お金がない」という課題や不幸)は、それより深いところに、あるいはそれに先行して、常に必ず、「お金への疎外」、すなわち、お金(という価値・ものさし)でしか幸せを感じることができないという、より基本的な疎外を重層的に伴っている。言い換えれば、「お金なんてなくたって、問題ない」という境地の存立可能性、あるいは、お金を介在させずに成立する満足や幸福の存立可能性が、その疎外(「お金からの疎外」)を感じている当事者に対して不可視になっている。

本論文でとりあげる具体的な事象(地域社会の活性化)との接点を意識して、もう一つ、次のような事例を追加してもよい。「うちの村にはコンビニすらない、つまらない田舎だ」との疎外意識(「コンビニからの疎外」)の根底には、コンビニがあること(だけ)が幸せの基準だという価値観、すなわち、「コンビニへの疎外」がある。「X(コンビニ)からの疎外」が不幸として体験されるのは、その前提として、「X(コンビニ)への疎外」が成立している場合に限られる。つまり、「X(コンビニ)への疎外」は「X(コンビニ)からの疎外」の必要条件である。言い換えれば、幸福や満足をもたらすかもしれない、Xとは別の対象や基準、たとえばYの可能性が排除され、当事者にYが見えなくなっていること—「X(コンビニ)への疎外」—が、「X(コンビニ)からの疎外」、すなわち、コンビニがないことを嘆く態度の根底に、必ずそれに先だって成立している。

この把握がなぜ重要かと言えば、多くの人は一ときには、直面する課題に対する深層構造に及ぶ理解や解析が求められている研究者ですら、「Xからの疎外」という表面に現れた課題(不幸)にのみ目を奪われ、先述したように、その直接的な解決、つまり、Xを与えることやXを支援することにまず歩を進めてしまうことが多いからである。しかし、宮本(2016)が、依存と支援の関係として指摘しているように、逆説的にも、この支援こそが、課題(不幸)をさらに根深いものにしていく場合がある)。もちろん、端的にXを供与し支援することが求められる場合があることも事実である。しかし、それでも、ここでの認識を踏まえてあえてそのようにするのは、無自覚なままにそうするのは、その意味がまったく異なる。

「Xがない」ことを嘆く地域社会に対して、外部からXを与えれば、「Xがない」という表面に現れた問題自体はとりあえず(疑似的に)解消される。しかし、こうした支援は、「Xからの疎外」の(疑似的な)解消には

なっても、その代償として、かえって「Xへの疎外」を維持・強化することになる。なぜなら、「Xへの疎外」は「Xからの疎外」の必要条件（前提）であるため、「Xからの疎外」を埋める実践（Xを支援する実践）は、その前提である「Xへの疎外」を、常に必ず、承認しつつ行われており、「Xへの疎外」は、その承認の反復によってその都度維持され、また強化されることになるからである。この点を理解することが、理論的にはもっとも肝心である。

具体的な事例を挙げて、この重要な論点を繰り返せば、以下ようになる。外部から（たとえば、東京から、役場から、ボランティアから）、道路、美術館、コンビニが与えられれば、道路、美術館、コンビニ「からの疎外」は（疑似的には）解消する。それらが「ない」ことから来る不幸は（疑似的には）緩和される。しかし、その裏側で、道路、美術館、コンビニ「への疎外」は、「からの疎外」の解消作業という実践においてそれが実際に前提にされたという意味で、かえって維持・強化されることになる。ここまで、「Xからの疎外」の解消というフレーズに、すべて「疑似的な」という限定句をつけてきたのは、このためである。

こうして、「Xからの疎外」に対する直接的な外部支援は、「Xへの疎外」を維持・促進してしまう。たとえば、「道路なんかなくても（多少不便でも）、かえって雑踏でゴミゴミしてなくていい」、「美術館なんてなくても、日本一の砂浜がある」、「工場で大量生産されたコンビニ弁当なんかより、町の定食屋の方がよほど美味しい」といった意識は、Xが外部から支援されることで当事者からどんどん遠のいていく。道路でしか、美術館でしか、コンビニでしか幸せや豊かさを感じることができない状態、つまり、「Xへの疎外」はますます深くなる。こうして、もしかしたら、コンビニより数倍魅力的かもしれない定食屋が、田舎くさい陳腐な対象へと姿を変えていく。そして、時として、待望のコンビニが誕生すると、そのあおりを受けて定食屋が廃業を余儀なくされる。しかも、やがて、「採算が合わない」としてコンビニが撤退して、何もなくなる一。

「Xからの疎外」を、外部からの支援を頼りに（疑似的に）解消するだけで、より基底的部分である「Xへの疎外」へと踏み込まないアプローチの陥穽は、次の形でもあらわれる。それは、ある特定のX（仮にX1と呼ぼう）に関する「からの疎外」が（疑似的に）解消されても、X2、X3といった次なるXが続々と登場してしまうという問題である。たとえば、「水がない」として農業の復興に後ろ向きだった人びとは、たとえ水を支援し

ても（実際、水源の問題は解決したとしても）、今度は、「農機具が壊れてしまった」と嘆き、それが解消すると、「若者（働き手）が足りない」と訴えるといった現象である。これは要するに、「（特定の）Xからの疎外」（変数としてのXは、X1、X2などいろいろな具体値をとりうる）を当事者にとって依存的な形で（疑似的に）解消しても、Xを外部から与えることで「Xからの疎外」を疑似回避するという構造自体の克服にはけっして至らない、それどころかますます事態は悪化する可能性がある、ということである。

## 6. 「Xへの疎外」の克服

では、「Xからの疎外」の抜本的克服—疑似的な解消ではなく—の鍵は、どこにあるのか。見田（1996）の議論に従えば、それは、二重の疎外構造の基底部をなす「Xへの疎外」の水準に求められねばならない。4節の末尾で言及した「Xがない、しかしYがある」の形式が、まさに「Xへの疎外」の水準にアプローチするための鍵を握っている。この形式は、その欠落や不足が目下の課題になっているX（たとえば、水、道路、若者）を満たすのではなく、Xとは別の対象Y（たとえば、山菜料理、伝統的な祭り、星空）に注目するものだった。だから、Xを直接充足することにはつながらない。その点で、「Xからの疎外」の克服という課題に対して限界も有している。その意味で万能というわけではない。

しかし、この方略は、外部支援による「Xからの疎外」の疑似解消が伴う、より根源的なレベルでの悪影響の克服には資するポテンシャルをもっている。その悪影響とは、「Xからの疎外」が疑似的に解消される過程で、かえって、「Xへの疎外」が維持・強化されることであった。この問題は、言いかえれば、「Xがない、しかしYがある」のYに相当する対象を、当事者が見いだす芽（機会、意欲）を摘んでしまう悪影響だと位置づけることができる。XならざるYを見いだす道が閉ざされること、言いかえれば、Xだけが唯一絶対の幸福の基準として自明視されること、これこそが「Xへの疎外」だからである。この意味で、「Xがない、しかしYがある」、言いかえれば、「Xへのこだわりをいったん棚上げて、（豊富にある）Yに注目してはいかがですか」との外部支援者の当事者に対する助言は、「Xへの疎外」を克服するための一つの道筋だと言える。

以上で、「Xがない、YがXです」の形式をとる黒潮町のフレーズがもつ意義を考察するための準備作業が整った。しかし、その主題へと移る前に、一つだけ重要な点を補足しておきたい。それは、「Xがない、しかし

Yがある」という回路によって、「Xへの疎外」からの解放が図られたとしても、もちろん、それは、同時に、新たに設定された志向対象である「Yへの疎外」とにらまれることだという点である。別の言い方をすれば、「Xからの疎外/Xへの疎外」という疎外の重層関係からトータルに逃れることは原則としてできない。私たちにできることは、それまでとられていた「Xへの疎外」に気づき、その外に出ることだけである。もちろん、それは、YというXとは別の対象「への疎外」に他ならないが、さらに「Yへの疎外」の外に出ることはできる。要するに、「Xへの疎外」(したがって、そこから生じる「Xからの疎外」を含めた疎外の重層関係)を前に私たちにできることは、現在とられている対象からその都度逃れていくという「運動」(ダイナミックな変化)だけであり、どこかに、究極の解放の地点、あらゆる「Xからの疎外/Xへの疎外」から免れた状態がスタティックな形で存在しているわけではない。

### 7. 「Xがない, YがXです」

本論文の考察の主題として提示した高知県黒潮町の「砂浜美術館」のキーフレーズは、「Xがない, YがXです」の形式をとっていた。まず第1に、この形式が、Xの欠落・不足を嘆くだけの姿勢、たとえば、「Xがない, Xが欲しい, しかしどうすることもできない」とはまったく異なることは明らかであろう。しかも第2に、外部支援を頼りにXの獲得・充足を目指す姿勢とも明確に異なる。つまり、「Xからの疎外」の疑似的な解消でもむろんない。

では、「Xからの疎外」の疑似的な解消ではなく、「Xへの疎外」の抜本的克服に結びつきうるアプローチとして前節で検討した「Xがない, しかしYがある」と比べてどうか。一見両者は似ている。前節で示したように、「Xがない, しかしYがある」は「Xへの疎外」の抜本的克服に通じるポテンシャルをもっており、この後詳述するように、「Xがない, YがXです」も、同じポテンシャルをもつと考えられるからである。しかし、筆者の考えでは、両者の間には微妙な、しかし、重要な違いがある。むしろ、両者の違いを通して、「Xがない, YがXです」の独自の特徴を明らかにすることができる。

注目すべき相違点は、「Xがない, しかしYがある」とは異なり、「Xがない, YがXです」においては、YがXの機能的等価物であること、すなわち、Yが、不足・欠落しているXの代替物であることが「明示的に表現」され、「あからさまに等値」されている点である。具体的に言えば、黒潮町の松本氏らが、「美しい砂浜が美術

館です」と宣言するとき、美しい砂浜こそが美術館の代替物であることがはっきりと意識されている。言い換えれば、(通常の意味での)美術館を欲することを放棄することが明示されている。これは、まさに、「X(美術館)への疎外」を抜本的に克服する姿勢である。美しい砂浜(Y)が美術館(X)としてすでに存在している以上、美術館(X)がないことなど「もはや問題ではない」と宣言されているからである。

このクリアな明言と比較すると、「Xがない, しかしYがある」は、「Xへの疎外」の抜本的克服という視点に立ったとき、若干切れ味が悪いと言わざるを得ない。たしかに、4節では、山菜料理、伝統的な祭り、星空といったY群が、欠落・不足する水、道路、若者といったX群に代わる対象として機能したと表記した。そして、まさに、この意味で、この形式も「Xへの疎外」の抜本的克服へ向けて着実に一步を踏み出している。しかし、XとYが明示的に等値・連結されていない以上、ここでのYは、Xの欠落・不足という課題を当座棚上げするための「踊り場」にとどまっていると言えよう。先にも引いた宮本(2016)の用語「めざす/すぞす」を用いて表現するならば、いったんはYとともに「すぞす」としても、Xを「めざす」態度が完全に払拭されたわけではなく、それは水面下に伏在していると言える。この意味では、「Xがない, しかしYがある」においては、—「Xがない, YがXです」と比較して—「Xへの疎外」の克服は徹底さを欠いていると位置づけることができる。

### 8. だれがYを見いだしたのか

7節の議論とは別に、もう一つ重要な論点を追加しておこう。それは、「だれがYを見いだしたのか」、言い換えれば、Yを見いだした主体はだれか、だれがどのようなポジションからYを発見したかという論点である。これまでの記述から明らかのように、黒潮町の事例では、長年にわたってXがないことに苦しみ抜いた、言い換えれば、「Xからの疎外/Xへの疎外」に苦しみ抜いた当事者が、苦闘の末に、ついにYを見いだしていた(しかも、前節で指摘したように、YをXの機能的等価物として明示的に位置づけている点が特徴的であった)。

また、木沢集落の事例(4節)では、山菜料理、伝統的な祭り、星空といったY群を見いだしたのは、集落に生きる当事者から見れば外部の支援者であったが、それは長年にわたって集落と交流を持ち続けている支援者であった。すなわち、宮本(2016)が慎重に記しているように、「準当事者」と呼ぶことすら可能な程度にまで当事者と分厚い交流を重ねた外部者による指摘だったか

らこそ，外部者が当初見いだしたY群とその意義が，X群の欠落・不足に苦しむ当事者にも理解され受け入れられ，Y群の魅力が当事者によって「再発見」，「再認識」されたわけで，そのために，Y群が「Xへの疎外」の抜本的克服に貢献したと考えられる。

当事者自身が見いだしたY（黒潮町の事例），準当事者（外部支援者）による助言を踏まえて当事者自身が再発見したY（木沢集落の事例）—以上2つの経験的事実は，Yを見いだす主体について，次の仮説を示唆しているように思われる。すなわち，「Xがない，YがXです」にせよ，「Xがない，しかしYがある」にせよ，Yの（再）発見が有効であるためには，Yを見いだす主体は，Xの欠落・不足に苦しむ当事者（ないし，準当事者）である必要がある。言い換えれば，「Xからの疎外」に苦しむ当事者（ないし，準当事者）自身が，主体的にYを（再）発見する必要がある。

次のような別の事例が，この仮説を傍証している。5節でコンビニと定食屋の例をあげた。「コンビニなんてなくても，こんな美味しい定食屋があるからいいですよ。私は，むしろそっちの方が好きだ」（「Xがない，しかしYがある」）という趣旨の言葉が，その土地の住民（当事者）ではなく都市部に住む旅行者—木沢集落の事例のように，繰り返しその土地を訪問する外部者（準当事者）ではなく，そこを訪問することは二度とないであろう，より強い意味での外部者—から発せられる場面は容易に想像できる。こうした場合，旅行者の言葉が，しばしば，「Xからの疎外」の安全圏から発せられていることが重要である。なぜなら，その旅行者が暮らす都市部にはコンビニが豊富にあるからである。ポイントは，この旅行者自身は「X（コンビニ）から疎外」されていないのはもちろん，「X（コンビニ）への疎外」の克服を必要としていないし，そのつもりもない場合が多いという点にある。

要するに，「Xがない，しかしYがある」（あるいは，「Xがない，YがXです」）は，一方で，「Xへの疎外」の克服に資する機能をもつものの，この旅行者の発言例からわかるように，Xが「ある」世界にいつでも立ち戻ることのできる外部者から発せられた場合，それは非常に空疎で，時に当事者に対して暴力的な性質すら帯びる。こ

のような場合，この形式は「Xへの疎外」の解消にはまったく貢献しない。その理由は，「コンビニにこだわらずに，定食屋に目をむけましょう」と言明したこの旅行者自身に，X（コンビニ）へのこだわりを捨てる気持ちがないからである。コンビニが多数存在する都市部にすぐに戻ることのできる旅行者は，「X（コンビニ）への疎外」を不幸としてではなく幸福として生きていけるポジションにいる。「X（コンビニ）への疎外」を自らの苦しみ・不幸として引き受けていないポジションから発せられる「Xがない，しかしYがある」（あるいは，「Xがない，YがXです」）は，多くの場合，無力である。

他方で，黒潮町の「Xがない，YがXです」は，「Xからの疎外」と闘い続けてきた当事者が発した言葉であった。また，木沢集落における「Xがない，しかしYがある」も，当事者と長年にわたって行動を共にした準当事者（外部支援者）に端を発し，最終的には当事者自身が自家薬籠中のものとした言葉であった。言い換えれば，それは，「Xへの疎外」を不幸として生きるポジションから発せられた言葉である。それが，これらのフレーズがもつ力強さの源泉である。これらのフレーズがもつ輝きは，それが外部から付与されるのではなく，徹底的に主体的に，内生的に（再）発見された点に由来している。

## 9. アクションリサーチへの示唆 —克服・解放の同時並行性

Yの（再）発見を伴うメッセージ（「Xがない，しかしYがある」）が，Xが欠落・不足する生活を送る当事者に対して外部者から送られるとき，それは，あるケースでは「Xへの疎外」の克服やそこからの解放につながった（木沢集落のケース）。他方で，別のケースでは，そうした効果をもたらさないどころか，当事者に対する冒険にすらなりうるのであった（「コンビニはなくても定食屋がある」のケース<sup>2)</sup>）。

この両極端を分かち要因について考察することは，当事者に対する外部支援のあり方に対して，ひいては，当事者（現場）に対する介入を基盤として学術的知識の獲得を目指すアクションリサーチに対して重要な示唆をもたらす。そのポイントを一言で表現すれば，外部者（介

2) 大きな話題にもなった「スタバはないが，砂場はある」との平井伸治鳥取県知事の発言に代表される，「Xがない」ことに対する「自虐的な」発言も，その発言者のポジションによって功罪両面の影響をもたらすと言えるだろう。たとえば，この知事の言葉は，実際に「すなば珈琲」という地元企業の誕生につながるなど，概ね前向きな反応を作りだしたと評価されている。しかし他方で，常にそのような結果を伴うとは限らないと思われる。

入者)によるYの提示を媒介にして「Xへの疎外」の克服が成功裏に進むとき、その克服は、当事者に対してだけでなく、多かれ少なかれ外部者(介入者)に対しても生じる、ということである。すなわち、「Xへの疎外」の克服が、当事者、外部者の双方で同時並行的に生じる場合にのみ、「Xがない、しかしYがある」は前向きな機能を果たすのである。

そのことの意味を、再び「コンビニがなくとも、定食屋がある」の例をもとに考えてみよう。この言葉は、前節で記したような機能不全を起こす場合もたしかにあるが、そうではないシナリオも考えられる。たとえば、この旅行者(強い意味での外部者)自身が、コンビニに拘泥することの愚や定食屋の貴重さを切実に感じたとしよう。もちろん、旅行者はコンビニが豊富にある都市部に居るが、それでも、この体験を機に、小規模でも原料や作り方にこだわった飲食店を最良にすることもあろう。より進んで、そのような飲食店を盛り上げるための社会運動に身を投じるかもしれない。仮に、事態がそのように進むとすれば、この旅行者は、自分自身が「X(コンビニ)への疎外」の影響下にあったことを強く自覚し、それを克服する方向で歩みを始めていると言える。そして、たとえ同じ言葉ではあっても、このような変化を遂げた旅行者からそれを聞いたとすれば、当事者の方も、「コンビニがない、しかし定食屋がある」という旅行者の言葉を正面から受けとめることができるだろう。「Xがない、しかしYがある」という外部者から当事者への助言を通した「Xへの疎外」からの解放は双方に同時並行的に訪れうるし、またそういう場合にのみ真に力を発揮すると主張するゆえんである。言い換えれば、「Xがない、しかしYがある」は、外部者から当事者へのワンウェイの教示・啓発ではなく、双方で同時並行的に生じる相互深化としてあらわれるのである。

ここまで、克服・解放は同時並行的に生じると述べてきたが、実は、厳密にはこの理解はまだ不正確である。「Xへの疎外」の克服、そこからの解放の大きさは、「Xからの疎外/Xへの疎外」に苦しんで来た当事者においてよりも、当の助言をなした外部者において、むしろ大きいと言わねばならない。なぜなら、先に明記したように、X(コンビニ)がないことに苦しむ当事者、言い換えれば、「X(コンビニ)から疎外」されている当事者は、「X(コンビニ)への疎外」を不幸として生きている。他方で、X(コンビニ)が豊富にある都市部に暮らす旅行者(外部者)は、「X(コンビニ)から疎外」されていないので、「X(コンビニ)への疎外」を幸福として生きている。このことは、実は、当事者より旅行

者(外部者)の方が、より強力に、より深く「X(コンビニ)への疎外」にトラップされていることを示唆している。それを幸福として生きている以上、旅行者(外部者)には、その外側に出ようともがく必要、すなわち、「Xへの疎外」に対して疑問を抱く必要がまったくないからである。

要するに、「X(コンビニ)への疎外」について、より深く知り、より多く学んだのは、外部者(介入者)の方だと言える。当事者はむしろ外部から介入した支援者を支えたと見ることもできる。これは、抑圧されている者、あるいは、恵まれていないポジションにある人びとこそ、言い換えれば、「Xからの疎外」に苦しむ人びとこそが、課題の本質(「Xへの疎外」の存在)に対する洞察と、それを踏まえた課題解決へ向けて、より大きなポテンシャルを有しているとする思想—たとえば、フレイレ(2011)による「被抑圧者の教育学」など—とも通じる議論である。

加えて、この点は、アクションリサーチ一般を支える哲学としても、きわめて重要な認識である。たとえば、渥美(2010)は、過去の被災地の被災者とともに、別の新しい被災地の支援にあたるアクションリサーチの中で、前者が後者に向けて発した「あせらないでください」というメッセージに、介入者(渥美)自身が学んだ経験について報告している。標準的とされるタイムスケジュール通りに回復・復興の道りをスムーズに歩むこと(そうなるように支援すること)が被災者には必要だし、それこそが被災者の利益になるとの大前提に、自分自身が強くとらわれていたとの自戒である。当事者(過去の被災地の被災者)は、スムーズに回復し復興することを強いられて自ら苦しんだからこそ、言い換えれば、「X(スムーズな復興)からの疎外」に苦しんだからこそ、その脱出口が「X(スムーズな復興)への疎外」を克服すること、つまり、あせらなくていいことの方にあるとの洞察を、介入者に先んじて得ていたのである。

ここには、そこに何らかの社会的課題を認め、その解決を図ろうと介入する外部者(アクションリサーチャー)が、介入のプロセスを通して当事者同様に多くを学ぶこと、いや、さらに進んで、当事者よりも多くを学ぶ可能性すら存在することが示されている。

## 10. 「Xがない、YがXです」の発展と境界

最後に、もう一度、黒潮町が掲げる「Xがない、YがXです」にもどって、大きく分けて2つの側面からこのフレーズをめぐる黒潮町の現状について考察して、本論文を締めくくりにする。

最初に注目するのは、このフレーズのその後の状況である。

「入野の浜が『美術館』になる事によって、松原・鯨・海亀・らっきょう・漂着物・砂・波といった『今まで何気なく見てきた物』が『作品』になってしまうことに気が付いたのです。」(松本(1999; 未公表メモ))

ここには、「Xがない，YがXです」の形式による事態の転換，すなわち、「Xへの疎外」の克服が、ある対象(X1, この場合、美術館)でひとたび生じると、それが他の対象(X2, X3…)へと波及していく可能性が示されている。これは、ちょうど、X1の欠落・不足を外部支援によって埋めても、X2, X3などが次々にあらわれるという課題(5節)、すなわち、「Xからの疎外」をめぐる依存と支援の袋小路から逃れられないという課題と、構造において同型であり、かつ方向においては対照的である。実際、漂着物の展覧会や砂像制作イベントは、今では「砂浜美術館」の定番メニューであるが、黒潮に乗って浜に流れつく雑多な漂着物は単なるゴミ、砂像は掃いて捨てるほどある砂の山だったはずである。ここに、「(厄介者だった)漂流物が展示品です」、「(ありふれた)砂が芸術品です」という形で、「YがXです」の「哲学」が成功裏に反復されていることを見てとることができる。

実際、松本氏は、「私たちの町には美術館がありません、美しい砂浜が美術館です」について、こう語っている。

「私にとっては、人間が生きていくために何が大切か……を教える“哲学”に近いものさえ伝えてくれるミラクルメッセージでした。」(松本(1999; 未公表メモ))

松本氏の言う「哲学」は、次のような形でさらに発展し、黒潮町の中に染みこんでいく。1990年前後、役場の中堅職員として「砂浜美術館」のプロジェクトを主導した松本氏が、42年間にわたる役場勤務の締めくくりとして務めたのは情報防災課長(町の防災行政の実務トップ)という役職であった。2012年3月の「巨大想定」の公表(2節)以降、松本氏は定年退職する2017年3月までその任にあった。この間、全国最悪の津波想定を突きつけられた町として、黒潮町は、松本氏のリーダーシップのもと、興味深い施策を続々と打ち出し実行に移してきた。その成果は、国内のみならず世界的にも注目

されることになった。たとえば、2016年11月、全世界から約150カ国、約250人の高校生を迎え、同町で開催された「国連世界津波の日：高校生サミット」は、それを象徴する出来事の一つであった。

同町の近年の防災施策について詳しくは、松本(2017)などを参照いただくとして、ここでは、施策や取り組みの多くが、「Xがない，YがXです」の形式を反復することで実行されている点を強調しておきたい。たとえば、全国最悪の高さの津波想定に直面する黒潮町であるが、海岸沿いに防潮堤はほとんどない(防潮堤を建設、増強しようとする動きもほとんどない)。代わって、松本氏がしたことは、町的全職員に本来業務とは別に、町内の各地域の防災担当の業務を割り当てる「防災地域担当制」を敷くことだった(全職員の業務量が一律増大するのだから、これは相当に思い切った施策である)。こうして誕生した地域担当職員(町的全職員)のファシリテーションのもと、2012年4月から2016年9月までのわずか4年半の間に、町内で1,056回もの住民参加の防災ワークショップを開催、参加人数はのべ48,222人(人口の約4倍)にのぼった。このワークショップの成果として、町内の津波浸水域に位置する全世帯について避難のための「戸別津波避難カルテ」が完成した。この間の経緯は、まさに、あのフレーズを地で行くもの、つまり、「私たちの町には防潮堤はありません、防災地域担当制(戸別津波避難カルテ)が防潮堤です」になっている。

次に注目するのは、黒潮町が抱える課題が、本論文で注目しているフレーズですべて解消されるほど単純ではないという点である。つまり、「Xがない，YがXです」がオールマイティというわけではない。端的に言って、このような形式では解消されない課題も多数ある。たとえば、Xそのものが是非とも必要であること、言い換えれば、先に5節でも示したように、「Xからの疎外」(Xがないこと)がストレートに解決されねばならないこともあるし、それだけが唯一の解決法だと思える場合も多い。

少しだけ例をあげておこう。先に黒潮町には防潮堤がそれほど多く存在しないと書いた。しかし、黒潮町の防災行政がハードウェアを軽視しているかと言えば、そのようなことはない。むしろ逆で、たとえば、1基建設するのに少なくとも1億円以上の経費を要する避難タワーを町内各地に相次いで整備し、高台の避難場所や避難路などの環境整備も非常に積極的に行っている。「X(避難場所)がない」では済まされないし、「YがX(避難場所)です」と等値できるようなYをそう簡単に見いだすことなどできなかったからである。こうした施設は

とても町の予算だけでは整備できず、外部からの支援に頼らざるを得ない。この点については、黒潮町も他の市町村同様、県や国の補助金に、その多くを頼っている。

また、「やはりX(コンビニ)が欲しい、(Yではなくて)Xそのものが欲しい」という強烈的なプレッシャー、言いかえれば、Xに対する人びとの強大な憧憬・渴望は、黒潮町にもむろん存在し続けている。たとえば、2節で黒潮町の人口の社会減について言及したが、転出先としては、近隣の相対的により大きな市町が多い。「相対的により大きな」をここでの脈絡で定義するならば、「X(コンビニ)がより多くある」市町ということである。この意味では、社会減の原因は津波リスクだけではない。「Xからの疎外」を直接的に埋めたい(Xが欲しい)というドライブは、「YがXです」だけですべて払拭できるほど小さなものではない。結論として、黒潮町は、「Xがない、YがXです」だけでなく、「Xがない、しかしYがある」や、外部支援によるXの獲得など、複数の戦略を駆使してきびしい状況と闘っていると言える。

しかし、これらの事実、すなわち、黒潮町に「Xがない」に対する有効打を十分打っていない一面もあること、あるいは、「Xがない」に対して、直接的にXを支援してもらおうすべに頼らざるを得ない一面も残っていることが、「Xがない、YがXです」の魅力を帳消しにするわけではない。少子高齢化、地場の経済・産業の弱体化に、さらに、巨大災害のリスク想定が追い打ちをかけている地域社会の問題は、たった一つのマジカルフレーズで雲霧散するほど軽いものではない。しかし他方で、これまで論じてきたように、このフレーズが、「地方再生(創生)」という難題を、従来多くの議論が焦点を当ててきた経済的側面、行政的側面、社会的側面などとまた別の観点、すなわち、そこに暮らす当事者のマインドセット—疎外の構造—という観点から解き明かし、新たな光を見いだす一助になっていることはたしかだと思われる。

#### 引用文献

- 渥美公秀 (2010). 災害復興過程の被災地伝承：小千谷市塩谷集落から刈羽村への手紙 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, **36**, 1-18.
- Freire, P. (1970). *Pedagogia do Oprimido*. Paz e Terra, São Paulo: Brazil (三砂ちづる (翻訳) (2011) 被抑圧者の教育学 (新訳) 亜紀書房)
- 黒潮町 (2016). 黒潮町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン (平成27年度版) <<http://www.town.kuroshio.lg.jp/img/files/pv/sosiki/2016/01/jinkou.pdf>> (2017年8月10日参照)
- 真木悠介・大澤真幸 (2014). 現代社会の存立構造／『現代社会の存立構造』を読む 朝日出版社
- 増田寛也 (編) (2014). 地方消滅 東京一極集中が招く人口急減 中公新書
- 松本敏郎 (2017). 「対策」ではなく「思想」から入る防災 地区防災計画学会誌, **10**, 9-13.
- 見田宗介 (1996). 現代社会の理論—情報化・消費化社会の現在と未来 岩波書店
- 宮本 匠 (2016). 減災学がめざすもの 矢守克也・宮本匠 (編) 「現場でつくる減災学」新曜社 pp.165-188.
- 藻谷浩介・NHK 広島取材班 (2013). 里山資本主義：日本経済は「安心の原理」で動く 角川書店
- 小田切徳美・広井良典・大江正章・藤山 浩 (2016). 田園回帰がひらく未来—農山村再生の最前線 岩波書店
- 岡田憲夫 (2015). ひとりから始める事起こしのすすめ—地域復興のためのゼロからの挑戦と実践システム理論— 関西学院大学出版会
- 大野 晃 (2005). 山村環境社会学序説—現代山村の限界集落化と流域共同管理 農山漁村文化協会
- 杉万俊夫 (2006). コミュニティのグループ・ダイナミックス 京都大学学術出版会
- NPO 砂浜美術館 (1989). 砂浜美術館ホームページ <<http://www.sunabi.com/>> (2017年8月10日参照)
- 友永公生 (2017). 地区防災計画と生業—WE CAN PROJECTを通じて— 地区防災計画学会誌, **10**, 14-18.
- 網島不二雄・岡田知弘・塩崎賢明・宮入興一 (編) (2016). 東日本大震災 復興の検証：どのようにして「惨事便乗型復興」を乗り越えるか 合同出版
- 矢作 弘 (2014). 縮小都市の挑戦 岩波書店
- 山下祐介 (2012). 限界集落の真実—過疎の村は消えるか? 筑摩書房
- 山下祐介 (2014). 地方消滅の罌：「増田レポート」と人口減少社会の正体 筑摩書房

## “No X, but Y is X”: Community revitalization strategy from the viewpoint of alienation theory

KATSUYA YAMORI (*Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University*)

FUHSING LEE (*Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University*)

A slogan created by Kuroshio Town, “Our town doesn’t have an art museum; our beautiful beach is our art museum,” follows a notable schema, “No X, but Y is X.” This paper shows, based on Mita’s alienation theory, that this schema can serve as a powerful tool for supporting the revitalization of rural communities suffering from rapid depopulation. The theory assumes a dual layer structure, “alienation from X” in the overt layer, preceded by “alienation to X” in the fundamental layer. “Alienation from X”; i.e., misfortune caused by the lack of X, is preceded by “alienation to X”, where X functions as the only standard for satisfaction. Obtaining X via outside assistance appears to be an easy solution; however, this is often unsatisfactory because it maintains “alienation to X.” In contrast, “No X, but Y is X”, in which local people declare that there is no need to seek X because Y is a functional equivalent of X, can be one of the most effective strategies for revitalizing rural communities.

**Key Words:** community revitalization, alienation theory, alienation from X, alienation to X, happiness